

京都大学	博士 (医学)	氏名	本田 五郎
論文題目	Approach for systematic resection of the liver antero-superior area: exposing Glissonian pedicles by prior dissection of the major hepatic fissure. (カントリー線を先行離断して肝門のグリソン鞘を露出する手技による系統的肝前上区域切除)		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>【背景】 肝細胞癌 (HCC) の多くは進行に伴って門脈浸潤を来し、肝内転移を起こす。そのため門脈を含んだグリソン鞘の基部 (グリソン茎) をできるだけ先に結紮し、そのグリソン茎によって支配される範囲の肝実質を切り取るように切除する系統的肝切除術は HCC に対する適切な術式であると考えられる。その様な中、肝前上区域 (Couinaud 分類の Segment 8) はすべての面を周囲の区域に囲まれ、支配するグリソン茎も肝実質内に埋まっているため、グリソン茎の先行処理や切離面の設定が他の区域と比較して難しい。そこで、肝臓の左右両葉を二分する Cantlie 線を先行して切り開くことにより、安全に肝前上区域のグリソン茎を露出して処理し、より安全かつ確実に系統的切除を行うことができると考え、実際の臨床で手術を施行した結果をまとめた。また、この術式の問題点として、Cantlie 線を先行して切り開くことにより肝前下区域 (Couinaud 分類の Segment 5) の drainage vein が切断されることによる同領域の鬱血性機能障害が懸念されるが、これまでその点に関する検討の報告は行われていない。</p> <p>【方法】 対象は HCC に対して本手技により系統的肝前上区域切除を行った 9 例 (平均年齢 58.8 歳、背景肝は B 型慢性肝炎 4 例、C 型慢性肝炎 5 例) とした。手術時間、出血量、術後在院日数、合併症および予後について調査し、さらに肝前下区域の鬱血による影響を検討するために、術後肝逸脱酵素の推移と術後 1 から 6 ヶ月後の画像検査上の同領域の萎縮状況を調査した。</p> <p>【結果】 手術時間は平均 311 分、出血量は平均 905g、術後在院日数は平均 17 日であった。術後合併症は、4 例において腹水または胸水の貯留を認めたが難治性のもはなく、胆汁漏や術後出血などは認めなかった。予後の平均観察期間は 46.4 ヶ月で、1 例のみが再発により 50.5 ヶ月後に現病死したが、残る 8 例 (88.9%) は再発なく生存中である。2 例において術後肝逸脱酵素の異常な上昇 (1000IU/L 超) を認め、別の 2 例において肝前下区域の萎縮を認めたが、術後に肝不全ないし遷延する肝機能異常を来したものは 1 例も無かった。</p> <p>【考察】 本手技による肝前上区域切除術は安全かつ有用な術式である。また、肝前上区域は肝臓の中央部分にあるため、同領域の腫瘍を切除する際には切除境界面の設定が難しいが、本手技を用いた系統的肝切除はグリソン鞘や肝静脈を目印にして切除境界面をデザインするため、確実な切除境界面の設定を可能にする。</p>			

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、その多くが進行に伴って門脈浸潤を来し、肝内転移を起こす肝細胞癌(HCC)に対して有用性が認められている系統的肝切除術(門脈を含んだグリソン鞘の基部であるグリソン茎をできるだけ先に結紮し、そのグリソン茎によって支配される範囲の肝実質を切り取るように切除する方法)を、特に肝臓の中央に位置する肝前上区域(Couinaud分類のSegment 8)の腫瘍に対して安全かつ確実にを行うための方法を論じたものである。具体的には、肝臓の左右両葉を二分するCantlie線を先行して切り開くことにより、安全に肝前上区域のグリソン茎を露出して処理し、より安全かつ確実に系統的切除を行うというもので、実際の臨床で9例に対して本法を用いて肝切除を施行し、手術後の経過や切除予後に関して良好な結果が得られている。その上でこの術式の問題点である、Cantlie線を先行して切り開くことによりdrainage veinが切断される肝前下区域(Couinaud分類のSegment5)の鬱血性機能障害についても調査検討が行われ、術後に肝不全ないし遷延する肝機能異常を来した症例が無かったことが報告されている。以上の結果より、肝前上区域の系統的肝切除術は、本手技を用いることによってより安全かつ確実に行うことが可能となると論じられている。

以上の研究は肝前上区域のHCCに対する安全かつ有効な系統的肝切除術の開発に貢献し、肝臓外科学の発展に寄与するところが多い。したがって、本論文は博士(医学)の学位論文として価値あるものと認める。

なお、本学位授与申請者は、平成21年7月23日実施の論文内容とそれに関連した試問、さらに学識確認のための試問を受けて合格と認められたものである。

要旨公開可能日： 年 月 日以降